報　告

再生産と剰余：スラッファとポスト・ケインジアン

八木　尚志
明治大学政治経済学部

再生産と剰余の経済学は，重農学派のケネーから古典派のアダム・スミス，D. リカードウを経て，K. マルクス，そして P. ガレニャーニ教授によれば，ベーム・バヴェルクに至る経済学の系譜である。現代では P. スラッファの経済学もまたこの系譜に属する。スラッファの多部門の生産体系では，賃金分配率，利潤率，総労働量のような数量は，経済全体の状態を表す集計量であり，部門別の分析と集計量分析を連結することを可能にする。すなわち，スラッファのモデルを拡張して，ポスト・ケインジアンのモデルと接合することが可能である。

スラッファの『商品による商品の生産』（1960 年）は，賃金後払いのモデルで，生産期間の期末に分配と生産手段の補填が行われる。資本家の保有する商品が生産期間の期末に賃金として労働力と交換され，次の生産期間に賃金として商品を労働者が消費して商品の再生産が行われ，期末に新たに生産された商品が資本家の手元に戻る。商品は労働を介して商品を生産することになる。労働者もまた商品を消費し労働力を再生産している。このプロセスは，商品と労働の二重の再生産過程として見ることができる。スラッファ体系の労働力は 2 つの側面を持つ。1 つは期末に商品と交換される労働力であり，このときの労働力の交換価値は貨幣賃金率 w_M である。もう 1 つは，生産過程で商品の生産に用いられる労働量である。生産過程で投入される労働量の 1 単位の評価の変数を労働の価値と呼び，v_L で表すことにする。$w_M = 1$ として商品の価格を表した場合，生産期間の期末に商品が購入できる支配労働量を把握することができる。$v_L = 1$ として価格と賃金を表す場合，生産期間中に投入された労働量で測定した商品の価値を把握することができる。期末に商品によって購入された労働力は次期の生産に投入されるので，期間を通じてみた場合，期末の支配労働量と次期の投下労働量は等しい。$w_M = 1$ と $v_L = 1$ とするときの商品と労働の二重の関係で再生産の過程を整合的に説明できる。

スラッファ体系では，現実の純生産物と標準純生産物の 2 つの異なる純生産物を考えることができる。標準純生産物ベクトルを $\mathbf{s}$，その価格ベクトルを $\mathbf{p}$，標準体系の産出量ベクトルを $\mathbf{q}$，労働投入係数ベクトルを $\mathbf{l}$ とする。固定資本等を含まない単純な生産体系では，現実の体系の労働量と標準体系の労働量が等しいと仮定する。その標準体系の労働量を $\mathbf{ql}$ とすると，$\mathbf{sp} = v_L \mathbf{ql}$ という標準純生産物に関する架空の生産方程式を考えることができる。この方程式は，$\mathbf{sp}/\mathbf{ql} = v_L = 1$ とすれば，労働量 1 単位が生産する標準純生産物の価値を 1 とする，あるいは労働の価値を 1 とするという標準の条件になる。労働量 1 単位が生産する標準純生産物の価値を 1 として表された賃金分配率を ω_S とすると，ω_S は標準純生産物で表された実質賃金率の意味を併せ持つ。$v_L = 1$ としたときの賃金分配率を ω_v とすると，ω_v は標準となる労働量の 1 単位のうち支払われた労働の割合を表すことになる。固定資本がない単純な体系では，ω_v と ω_S を無名数とみれば $\omega_v = \omega_S$ である。

固定資本ストック等がない単純なスラッファ体系では，資本は現実の体系の生産された生産手段（中間投入）と標準体系の生産された生産手段という2つの異なる資本の概念が存在する。資本に関してさらに重要なのは，標準体系の生産された生産手段（流動資本）と，資本としての賃金，という二つの異なる資本の見方である。通常の資本および資本としての賃金という二つの異なる資本概念に対応して，利潤率についても，通常の資本に対する利潤率 r_K と，資本としての賃金に対する利潤率 r_w，の二つの異なる利潤率を定義することができる。通常の資本に対する利潤率 r_K と ω_v または ω_S の関係は，最大利潤率を R とすると

$$r_K = R(1-\omega_v) \text{ または } r_K = R(1-\omega_S)$$

である。下の図2がこの関係を表している。他方，賃金を資本とみなした場合の利潤率は

$$r_w = (1-\omega_v)/\omega_v = r_K/(R-r_K) = r_K/\omega_v R$$

である。R は投入係数行列の最大固有値の逆数から1を引いた値で与えられる。

スラッファ体系を，固定資本ストックへの利潤や輸入を含む産業連関表に適用可能なモデルに拡張することが可能である。この拡張体系では，単純な体系とは異なり，輸入や固定資本減耗を間接賃金とみなして標準労働を再定義する必要がある。固定資本ストックと輸入が存在するモデルで，再定義された標準労働を $\mathbf{ql}$ とする。貨幣で表された部門別固定資本ストックのベクトルを貨幣賃金率で割り支配労働量で表された部門別固定資本ストックベクトルに変換し，さらにそのベクトルの要素を部門別の総産出量で割って固定資本ストックに関する係数ベクトルを求め，それを $\mathbf{k}_w$ とする。同様に，非競争輸入型産業連関表の輸入ベクトルを貨幣賃金率で割り支配労働量で表された輸入ベクトルに変換し，さらにそのベクトルの要素を部門別の総産出量で割って輸入の係数ベクトルを求め，それを $\mathbf{m}_w$ とする。そして $\mu = \mathbf{qm}_w/\mathbf{ql}$ を定義し，$\phi = 1 + \mu$ と表す。また，$\kappa_Z = R\mathbf{qk}_w/\phi\mathbf{ql}$，および $\mu_Z = R\mathbf{qm}_w/\phi\mathbf{ql}$ とする。そうすると，固定資本ストックと輸入を含む拡張された体系の分配関係は，

$$1 = \omega_S + r_w\omega_S + r_w\omega_S\kappa_Z + r_w\omega_S\mu_Z$$

となり，ω_v と r_w の分配の関係が1次元で捉えられている。これは図3の縦軸で表されている。

図1は単純なスラッファ体系で商品 i を標準とした場合の賃金曲線である。図2は $\mathbf{sp/ql} = 1$

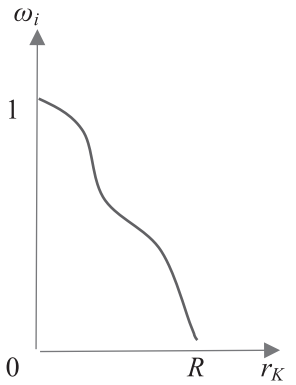

図1

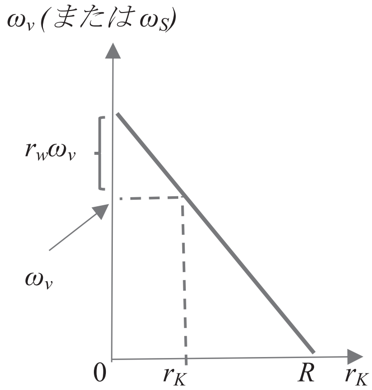

図2

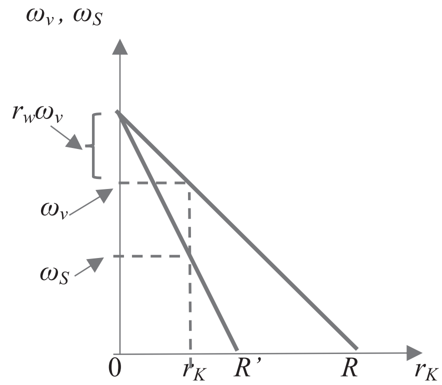

図3

または $v_L=1$ とした場合の賃金曲線である。このとき，資本としての賃金に対する利潤率 r_w は，図2の縦軸上で，$r_w\omega_v$ として表されている。$r_w\omega_v$ は $v_L=1$ のうちの利潤相当分である。図3は，固定資本ストックと輸入を含む体系における賃金曲線を表している。R' は拡張された体系の最大利潤率である。この場合，ω_v と ω_S を無名数とみれば，$\omega_v>\omega_S$ となり両者は等しくない。

固定資本と輸入を含む拡張された体系において，物価水準 P_M と ω_S を以下のように定義する。

$$P_M=\mathbf{sp}_M/\mathbf{ql}\phi \qquad \omega_S=w_M\mathbf{ql}\phi/\mathbf{sp}_M$$

そうすると，式 $1=\omega_S+r_w\omega_S+r_w\omega_S\kappa_Z+r_w\omega_S\mu_Z$ から，以下の式を得る。

$$1/\omega_S=P_M/w_M=1+r_w+r_w\kappa_Z+r_w\mu_Z$$

この式を変形すると

$$P_M=(1+r_w+r_w\kappa_Z+r_w\mu_Z)w_M$$

となる。これが拡張体系から導出された新しいマークアップ方程式である。この式には標準労働生産性指数を組み込むことができる。ポスト・ケインジアンのモデルにおいてマークアップ方程式は重要な構成要素となっている。以上のように，多部門生産体系を基礎として，ポスト・ケインジアンのモデルにおける重要な構成要素であるマークアップ式を導出することが可能である。

付記　西川潤先生には，ハーコート教授，パシネッティ教授，ガレニャーニ教授の著書を読んで書いた卒業論文作成を指導していただき，カレツキー等の著書についても指導をしていただいた。さらに久保田明光教授のケネー研究を念頭に置きながら，スラッファ研究に着手したことを考慮して，表題のテーマで報告させていただくことにした。